

---

# アイドルの恋愛戦争

小説初心者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイドルの恋愛戦争

### 【Nコード】

N2110BA

### 【作者名】

小説初心者

### 【あらすじ】

アイドルとの恋愛を書いたものです。  
ぜひ見てください。

## 1話 出会い

「みなさん、盛り上がってますか〜！」

「いえ〜い」

「それでは新曲いっちあいますよ。聞いてください。『恋するアイドル』！〜！」

「智、お前のお蔭で念願のコンサートに行けたぜ。ありがとうな。」

「気にするなよ、蓮司。お前が行くって言わなかったら俺もいけなかったしさ。」

今日は俺と蓮司で初めてのコンサートに行った。しかも、中々チケットが取れない超人気アイドル『フェアリーキュア』コンサートだった。そんなコンサートに行った後のおれたちはテンションが高かったの  
で夜まで遊びまわっていた。

「そろそろ12時なるから帰らねえか？蓮司。」

「そうしようか。じゃあ、また大学でな。」

こうして蓮司と別れて帰ることにした。

裏路地に入ったところで女の子がうずくまっていた。

「・・・どうしたんだろうか。もしかしてレイプにでもあったのだろうか？」

「いやいや。服は乱れてないから大丈夫だろうな。でも一応声をかけるか。」

「君、こんな所でどうかしたの？」

「え〜と、まあ迷子になってしまっただけ・・・。」

女の子は立ち上がってこっちを向いた。

身長は140後半位で顔から見て中学生くらいかな。しかもかなりかわいい顔をしている。

「そうなんだ。中学生なんだからこんな時間は危ないよ。」

そしたら女の子は顔をムツとさせた。

「私はこれでも20歳です。」

「えっ！！マジですか。すみませんでした。」

俺はびっくりしてかなりの勢いで謝った。

そしておすおすと顔を覗いた。ここであることに気が付いた。

この顔どっかで見えたことがあるんだよね。んう！！待て待て待て！もしかしてフェアリーキュアのリーダーの高波愛奈じゃないか！！

「なんで高波愛奈がこんなところにいるんだ？」

かなり興奮しているのを落ち着けて聞いてみた。

「私、コンサートの後マネージャーとけんかして飛び出してきたんです。

でもここには初めて来たし、携帯も財布もないので困っていたんです。」

「ふうんそうなんだ。それなら俺が3択選ばしてやるよ。1、俺が金を貸すからタクシーで帰る。

2、俺の部屋で休んで始発の電車で帰る。3このまま迷い続ける。どれがいいかな。」

「それなら、2番をお願いします。」

「うん、わかった。今からタクシー呼ぶか・ら・．．．ええ〜！！  
いまなんて言った？」

俺はもちろん1番を選ぶと思っていたから、もう財布に手をかけていた。

だが予想外の答えにびっくりした。

「だから、2です。だってタクシーだとかなり高いですよ。

それにこんなところにいたらどうなるか・．．だから2をお願いします。」

「わかったよ。それならついてきてくれ。」

こうして俺はアイドルを部屋に連れて行くことになった。

20分くらい歩いたらアパートが見えてきた。

「あそこが俺が住んでいるアパートです。」

「ふん。そうだ、聞きたいことがあるんですけど・・・」

「なんだい？」

愛奈は少しもじもじしながら聞いていた。

「私たちフェアリーキュアの7人で誰を推しているんですか？」

あゝ、推しメンのことね。それなら答えは簡単だな。

「俺は、高波愛奈さん。あなたが推しメンです。」

「本当ですか？」

「嘘だと思うなら部屋に入ってみるといい。」

そう言い部屋のカギを開けた。

愛奈は部屋に入って行った。

入ったらあつ、という声を上げた。

見た所にはグッツがたくさんあった。

その8割が愛奈のグッツだった。

「本人を前にすると恥ずかしいけどこれでわかったかな？」

「はい、とっても嬉しいです。」

「それじゃあ、ベッドに座っというて温かい飲み物出すから。勘違いするなよ。」

部屋が狭くて座る物がなくてだからな。」

ココアを作って出してあげた。

その時、グ〜と愛奈から音がした。

「はは、お腹がすいているんですね。朝の残りでもいいなら今出しますから。」

「はい、ありがとうございます。」

俺は朝の残り物のパスタと肉じゃがを温めて出した。

「不味くはないと思うから。」

「わ〜い。とても美味しそうですね。いただきます。・・・美味しいです。これ手作りだなんてすごいです。・・・あれ？お腹なってますよ？食べないんですか？」

愛奈が食べている途中で俺のお腹が鳴ってしまった。

夜ご飯はまだだったからな。仕方がないか。

でも・・・

「いや〜、言いにくいんですけどそれが最後なんですよね。」

「えっ!」

そしたら愛奈は泣き出した。

「どうしたんだよ。なく必要ないだろう?」

「だって、だって、ヒッグ・私のせいで智さんが食べられないんですから。」

「そんなこと愛奈さんが気にする必要ないよ。だって俺なんかより愛奈さんの方が

いろいろあつて疲れているだろ?それだったら愛奈さんを優先して当然じゃないか。」

愛奈を落ち着かせるために頭を撫でてあげた。

愛奈がビクツとしたけどすぐに泣き止んで笑顔になった。

「今のは嫌だったかな?」

「いいえ。初めてでびっくりしただけです。もっとしてください。」

「あとでならいいよ。皿を洗って来るから。」

皿を洗いに台所へ行った。

戻ってくると愛奈はベットで寝ていた。

疲れていたんだろ?な。

そのまま寝かせてあげることにした。

俺が頭を撫でてあげると眩しいくらいの笑顔で寝ていた。

可愛過ぎるだろこれ。こんなかわいい童顔を見ていたらロリに目覚めるだろ?!!

どうにか自分を落ち着かせて壁にもたれ掛けて寝ることにした。



## 1話 出会い（後書き）

この作品がここでの初めての作品になりました。  
読んでくれたみなさん、ありがとうございます。  
ぜひ応援してください。

## 2話 初めてのキス

「ふうわゝあ。目が覚めちゃったな。まだ、朝の4時じゃん。まだ寝ようかな。」

うゝ、4月だっていうのにまだ寒んだなこの時間は。」

そこでふと下を見ると智が寝ていた。

なんでそんなところで寝ているのかな？まさか私のためにそんなところで寝ているのかな？

うわあ、しかも毛布きてないし寒そうだな。どうしたらいいのかな？

「あつ、そうだ。一緒に寝てあげようかな。」

愛奈は毛布を持って智の隣に来た。

智に密着してから毛布を掛けた。

ふふふ^^あたたかいな智さん。男の人と寝るのって初めてだな。ちよつと浮かれながら寝ようとした。

愛奈が寝ようとしたときに智が起きてしまった。

なんだ？隣が温かいな。って愛奈さんが隣で寝てるじゃん!!

「愛奈さんなんで隣で寝ているんですか。」

「あつ、ごめんね起こしちゃったみたいですね。一緒に寝るの嫌でしたか？」

「そうじゃなくて、なんで隣で寝ているんですか。もし俺が悪い人だったら何されるかわかりませんよ。それにアイドルがそんなことしちゃ駄目じゃないですか。」

俺は怒っているように声を荒げていった。

愛奈はなぜ自分が怒られたかが分からず泣き始めた。

「だって・・・ヒッグ・智さんが寒そうだ・ウウ・ったし、智さんは優しい人だもん・・・ウツグ」

さすがにこのまま泣かしておくのもまずいと思い謝ることにした。  
愛奈さんの頭を撫でながら

「怒ってごめん。俺のことを思ってしてくれたのに・・・。わかった、今日はこれで寝ようか。」

撫でていると泣き止んで笑顔で

「本当にいいんですか？」

つと聞いてきた。

「ああ、もちろんいいよ。アイドルと寝れるなんて本当はすんごくうれしいから。」

「やった〜。それなら・・・っえい。」

愛奈が智に抱き着いてきた。

俺は少し慌てながら聞いた。

「おい、抱き着いていいのかよ。」

「はい。だってこれの方が温かいですよ。それに好きだからいいんです。」

最後の方は聞き取れなかった。

「愛奈さんがいいならいいですよ。」

「あと、智さんにお願ひがあるんですけど・・・」

「なんだい？」

「その、私が寝るまで頭をなでなでしててください。」  
顔を赤くして、おずおずと聞いてきた。

「わかりました。おやすみなさい愛奈さん。」

愛奈の頭をなでなでした。

されている間はずっと笑顔でいた。  
3分くらいしたら眠ってしまった。

「寝るのが早いですね、愛奈さんは。寝顔が可愛過ぎる。やばい、  
こんなの見ていると襲つかも。」

それにロリコンにも目覚めるかもしれない。」

そんな2つの衝動を抑えながらどうにか眠りについた。

朝に目が覚めたのは愛奈が先だった。

普段から仕事が忙しいから朝は早いのだ。

愛奈は智を起こさないように毛布から出て洗面台に向かった。

顔を洗って水を飲んだら戻ってきた。

朝はまだ寒かったのでまた毛布にくるまった。

よくよく考えたら男の人の寝顔を見るのは初めてだったのでじっくりと近くで見ることにした。

いびきも掻かず寝相も悪くない智の顔にどんどん顔を近づけて行った。

「ツチュ」

「§ § & 」

智の顔が少し動いたら智の頬にキスをしてしまった。

突然のことでびっくりして、顔が赤くなってしまった。

初めてしちゃったよ。キスを。どうしよう、起きてないよね・・・  
そーと智の顔を見ると丁度今起きた。

「ううん。どうしたんだい？顔を赤くして。」

「いやいや、なんでもないですよ。それよりもそろそろ帰りたいんですけど・・・」

今のことを隠すために話を逸らした。

「わかったよ」

智はお金を出して、駅までの道の案内をした。

「それではありがとうございました。今度お金返しますし、お礼もしますから。」

「お礼なんかいいから。じゃあね。」

「オキナなら。」

「こつして高波愛奈は帰っていった。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2110ba/>

---

アイドルの恋愛戦争

2012年1月5日16時47分発行